平成廿四年三月廿五日

研究資料

第七号

Version 0.7

須佐郷土史研究會

東京部会

◇ 序文 ◇

「温故」第一号の冒頭に『高山狗留孫佛縁起並高山の縁由』という文章があります。この文章は（口訳）となっていて、同文が『須佐町誌』875頁に「須佐の伝説」として収められています。

今回は口訳ではなく古文書でこれを読んでみましょう。『須佐町誌』によるとここに取り上げる文書は「村岡家文書」であり、元禄十六年に紹孝寺住職宗岩翁が書き残したものだと言うことです（松夫龍氏注解）。そして次のように記述されています。

『　狗留孫山道昌庵後良依
公儀の命によって書記された縁起は、これまで秘せられて年久しく民間に有った。近頃これを手に入れたが紙は腐り字は損なわれて、読む人をして口惜しがらせた。野頭村の山吏御手洗氏治部がこれを読み正して欲しいと乞うので禅修行の余暇をみて、煩雑な所はこれを除き、略された所はこれを詳しく付加し、誤りの所は訂正して、この記録を作ったのである。
元禄十六年龍集注1
葵未正月吉日
前総持紹孝現住門超叟宗岩　謹誌　　判　』

この文書は内容の真偽は別として、高山黄帝社、八相権現に関する記録としては、古くは風土注進案などにも引用されています。古い本の中では、黄帝社と八相権現社を混同している個所もあるが、両社はもともと別個のものと考えられています。狗留孫とはサンスクリット語（梵語のことで印度古代の文章語）で「願いごとが叶う」という意味を持っています。「山口県風土誌」の編者近藤清石は「黄帝はもともと須佐之男命であったのが後に黄帝に誤って伝えられたもので、スサの地名、古くは神山と書いたが後に山が高いので高山と書くようになった」という千家清主の論も併せ引用して、この方が正しいのではないかと記しています。（以上、『須佐町誌』から）

黄帝は漢代の司馬遷による『史記』や『国語・晋語』によると、少典の子。姫水のほとりに生まれたので姓は姫姓、名は軒轅（けんえん）という。帝鴻氏とも呼ばれ、山海経に登場する怪神・帝鴻と同一のものとする説もあります。蚩尤（しゆう）を討って諸侯の人望を集め、神農氏に代わって帝となりました。『史記』はその治世を、従わない者を討ち、道を開いて、後世の春秋戦国時代に中国とされる領域をすみずみまで統治した開国の帝王の時代として描いています。

彼以降の四人の五帝と、夏、殷、周、秦の始祖を初め、数多くの諸侯が黄帝の子孫であるとされています。恐らくは、中国に都市国家群が形成され、それぞれの君主が諸侯となっていく過程で、擬制的な血縁関係を結んでいった諸侯たちの始祖として

黄帝像が仮託されたのでしょう。さらに後世になると、中国の多くの姓氏が始祖を三代の帝王や諸侯としたので、現在も多くの漢民族は黄帝を先祖に仰いでいます。また、清代末期に革命派が、黄帝が即位した年を紀元とする黄帝紀元と称する暦を用いて清朝への対抗意識を示したことはよく知られています。

しかし、辛亥革命後に至り、革命支持者を中心に黄帝の存在を否定する主張が高まりました。日本でも同様の議論が起こり、白鳥庫吉・市村瓚次郎・飯島忠夫らが黄帝の実在性を否定する論文を著しています。

その一方で黄帝は中国医学の始祖として、現在でも尊崇を集めています。漢の時代では、著者不明の医学書は、黄帝のものとして権威を付けるのが流行しました。現存する中国最古の医学書『黄帝内経素問』、『黄帝内経霊枢』も、黄帝の著作とされています。（以上、ウイキペディア百科事典より）

文中に登場する黄帝の家臣、貨狄は中国の伝説上の船の発明者です。謡曲「自然居士」（じねんこじ）の詞章の中に舞囃子としてその物語が有りますので巻末の補注を見て下さい。

文書の冒頭に「高山黄帝社本地」と書かれています。本地（ほんじ）とは日本の神は本地である仏・菩薩が衆生救済のために姿を変えて垂迹されたものだという神仏同体説で、平安時代に始まり、明治初期に神仏分離で衰えるまで、小説、物語、浄瑠璃、説経、等を通じて神仏の本縁、寺社の由緒などが説かれました。この文書の書き方もその影響を受けています。例えば熊野権現の本地は阿弥陀如来と説くのと同じです。

この文書を史料として読んで感じた事があります。

○第一に口訳と文書とは全く別物だと言うことです。口訳の内容は文書と同じですが、殆ど創作と言って差し支えない程注釈が施されています。しかし、現代人が内容を理解するにはこの方が便利です。

○史料にはこの序文で紹介した元禄十六年葵未正月吉日の宗岩翁の後書き部分がありません。

以上を参考として読んで下さい。

（栗山）

◇目次◇

◇「高山黄帝社縁紀并山之由縁」……5頁
◇「補注」……26頁

◇ 凡例 ◇

一、**〈原則〉**全体を通して、可能な限り古文書原本に忠実に読解文を表記する。

◇原文が旧漢字の時は、活字がある限り旧漢字で表記する。活字が無いときに限り常用漢字を使用する。

◇異体字は常用漢字を用いる。〈例〉＝才（等）支（事）、辿（迄）

◇変体仮名は原文通りとする。〈例〉＝者（は）、幾（き）、丹（も）、与（と）、尓（に）、江（え）、之（の）、而（て）、連（れ）　など。

◇助詞も原文通り表記する

ヨリ、より、ニテ、ニ而（ニて）、　ニて、候得共（候え共）、　ニ付

◇活字が無い合字・省字には常用漢字を用いる。

〈例〉　より、トモ、トキ、として（〆）、など。

但し、活字があるものは原文の通り。〈例〉廿、杢、など

◇繰り返しの表記　〈漢字〉〃→々、〈仮名〉ゝ、〈二字以上〉〳〵

一、**文字の大きさ**

◇助詞等に右寄せの小文字表記は適用しない。全文を同じ大きさの活字で表記する。

◇返り点は使用しない。代わりに難読個所にはヨミのルビを打つ。

以上はＨＰにhtml表記する場合、縦書きを横書表記に変更する場合などに生じる諸問題を回避する為である。

一、**誤字、誤記、衍字、あて字など**

◇右傍に正字をルビで示し〈ｘカ〉とする。但し、明らかな誤字は正字と置き換える。

◇意味不明の場合は（ママ）を付す。

◇あて字 には正字でルビを打つ。

◇重複（衍字）の場合は（衍カ）と注記する。

一、**欠字、虫損、その他判読不能箇所**

◇欠字は□で表す。字数が確認出来るときは□□で文字数だけ□で埋める。字数が判らないときは▯で示す。推読可能な欠字は□に推読文字のルビを打ち〈ｘカ〉と表記する。

◇判読不能個所は□ないし▯で示す。

◇虫損破壊で判読できない箇所も同様とし虫損とする。

◇推読個所は同じく▯で示し、右傍に（…カ）と注記する。

一、**抹消部分**

◇抹消部分は読解しない（含、見せ消ちや抹消文字の横に〃を付けた場合など）

一、**氏名・地名など固有名詞の連記には中黒（・）を付け区分する。**

一、**朱書、後筆、付箋など**

◇該当部分を「」で囲み、封紙ウワ書、端裏書、端書、裏書、朱書、異筆、後書、付箋、張紙、刎紙などと注記して表記する。

一、**花押・印章など**

◇花押が書かれている場所に花押と記し、印章が押されているときは〈印〉で表す。

一、**注釈**

◇人名、地名、特殊な用語、現代使用されていない用語、特殊な表記などの説明には「注ｘ」を付け頁毎に脚注を付ける。

◇長い注記が必要な場合には、巻末補注を設ける。

◇西暦年数、時刻など簡単な摘要は注釈代わりに適宜ルビを付ける。

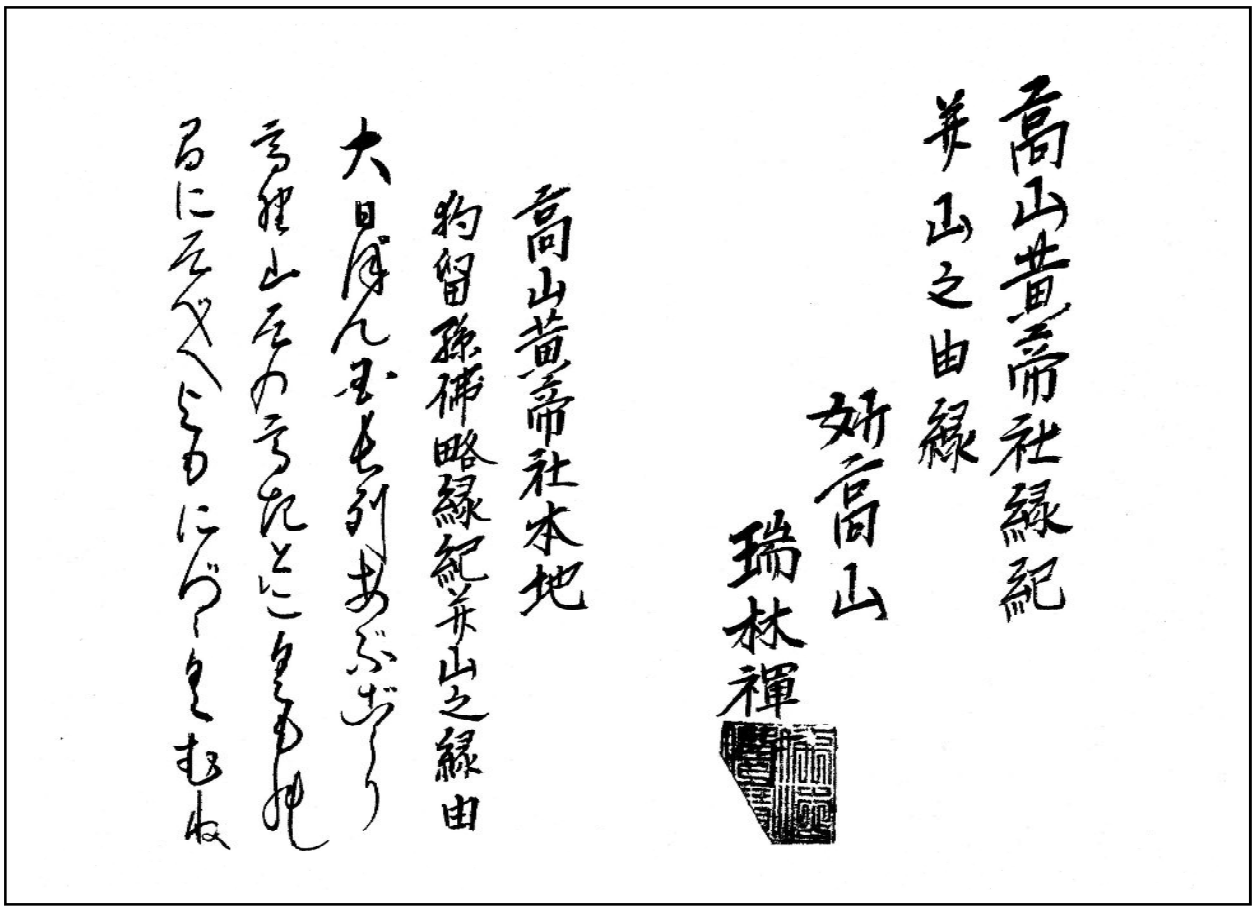
◇割り注は原文通りに表記する。

一、**出典、参考文献**

◇出典は原則として著者と書名を表記し必要に応じて頁数を示す。HPはURLを表記する。

◇参考文献は巻末の一覧表に詳細を示す。

以上



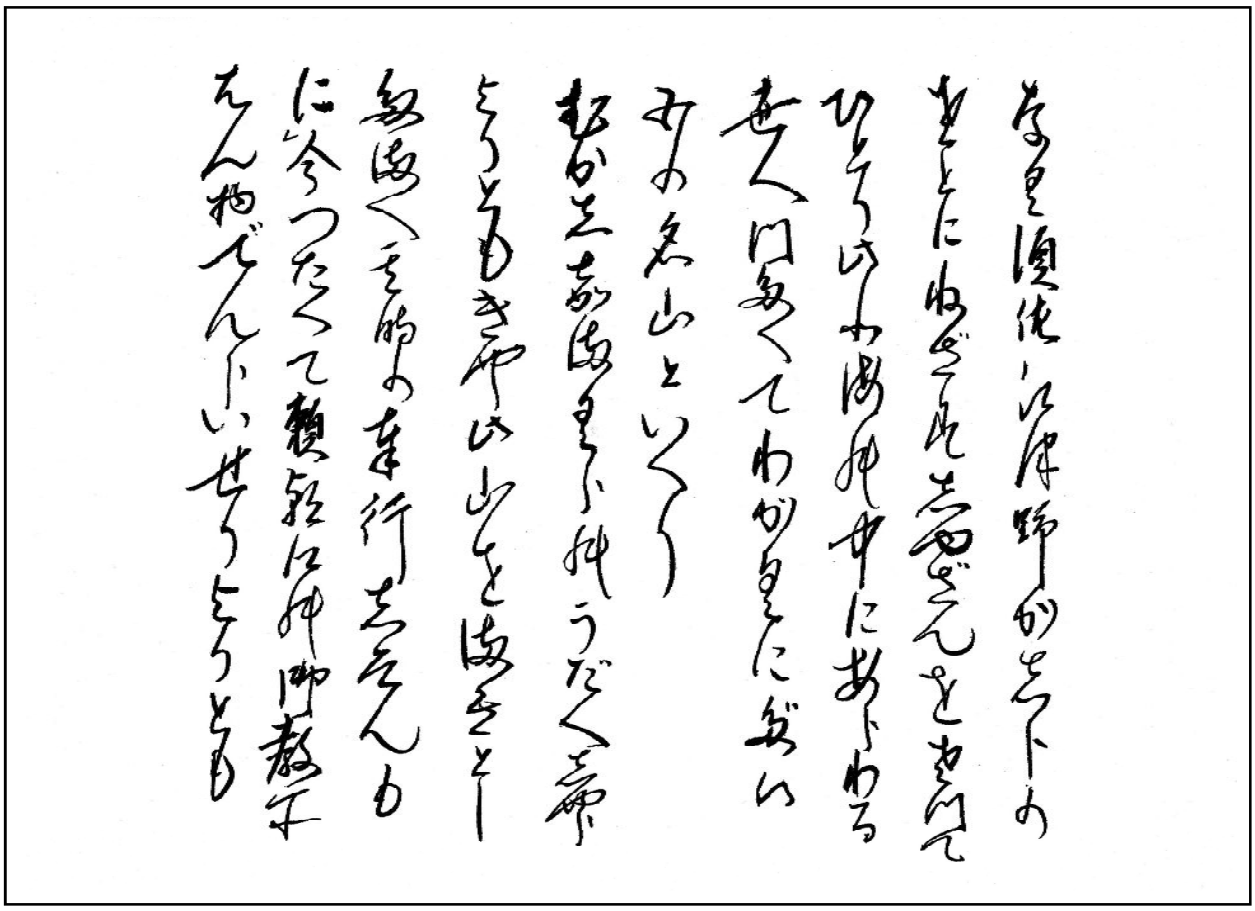
高山黄帝社縁紀并山之由縁

妙高山　瑞林禅寺

高山黄帝社本地
狗留孫(くるそん)佛略縁紀　并　山之縁由

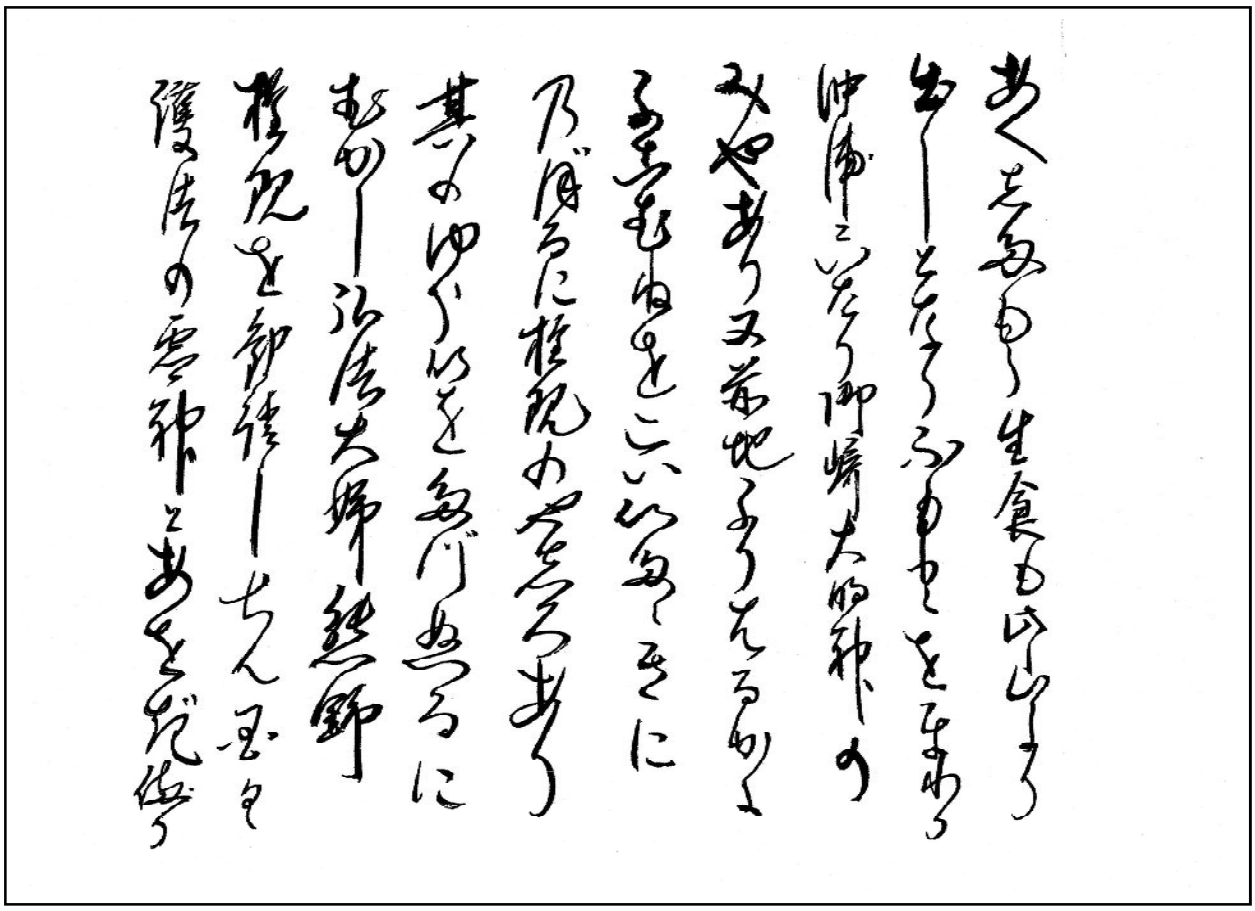
大日ほん(本)国長州あぶごり(阿武郡)
高野山(雲)その高きことくもの(事)
間にそべへ(聳え)　ともにつくむね(峰)

*1 狗留孫佛（くるそんぶつ）＝過去七仏の第四の仏。賢劫（げんごう）一千佛の最首。狗留孫とは梵語（サンスクリット語）の音訳で「実に妙なる成就」「願いごとが 叶う」という意味。



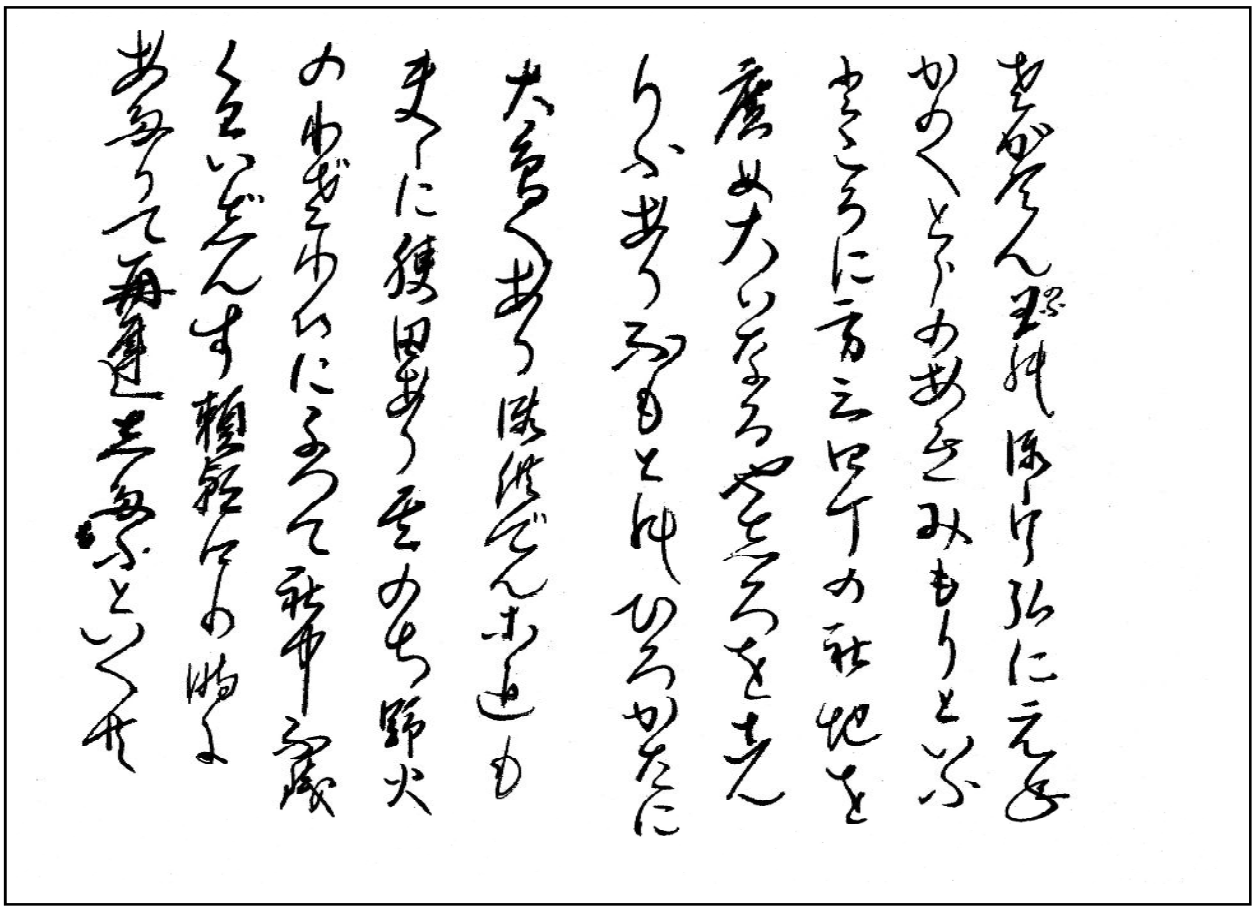
なく須佐　江津　野がしらの（野頭）
さとにねざす　しゆざん（首山）[注1]をさつ
て
ひとり此北海の中にあらわる
世人つたへてわがくにだい（我国）（伝）（第）
五の名山[注2]といへり（昔）
むかしかまくらのうだへしやう（鎌倉）（右大将）（牧）
よりともきやう（頼朝）（卿）此山をまきとし（子孫）
たまへ　其時の奉行しそんも（給）
今につたへて頼朝郷の御教所（伝来）（頼朝）
はん物でんらいせり（判）　よりとも

*1 しゅざん＝首山。巻末補注１参照。
*2 第五の名山＝巻末補注１参照。中国の５嶽（華山、首山、大室、泰山、東莱）になぞらえた表現。

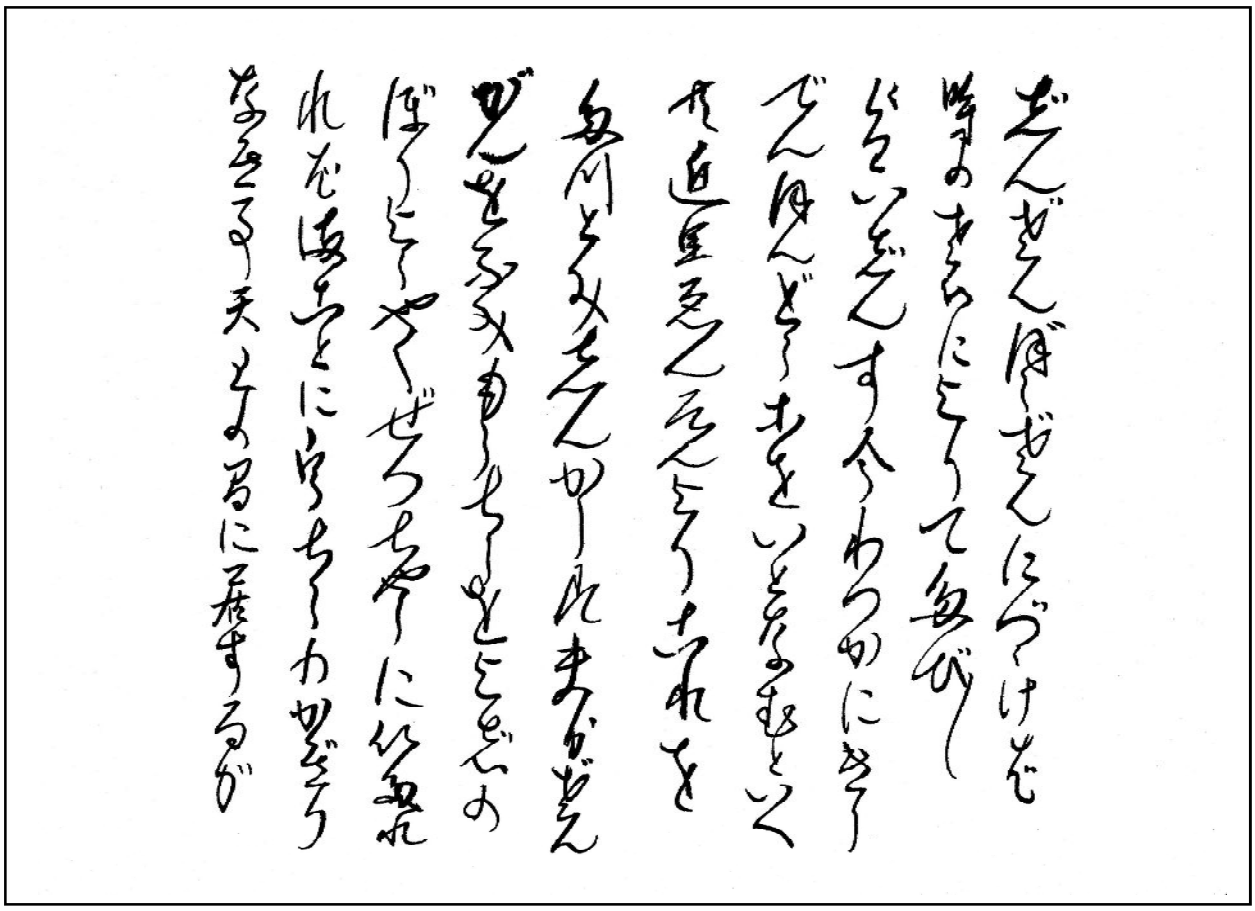


あへしたもう生食（いけすき）も此山より
出しとなり　ふもとをまわり
沖浦ニいたり御崎大明神の
みやあり　又前地よりはるかに
よこむねをこい　いたゝきに
のぼるに権現のやしろあり
其のゆらいをたづぬるに
むかし弘法大姉　熊野
権現を勧請しちんこく
護法の霊神とあをぎ侍り

*2 生食（いけすき）＝馬の名前。「生食」は、梶原景季が頼朝に賜った「磨墨」とともに知られた名馬で、高綱と景季が先陣を争った宇治川の戦いの物語でもよく知られている。高綱は、源頼朝から賜った名馬「生食」（いけづき）の霊を慰めるため駒形明神として祀ったが、その社は今はなく、横浜鳥山に馬頭観音堂として残されている。



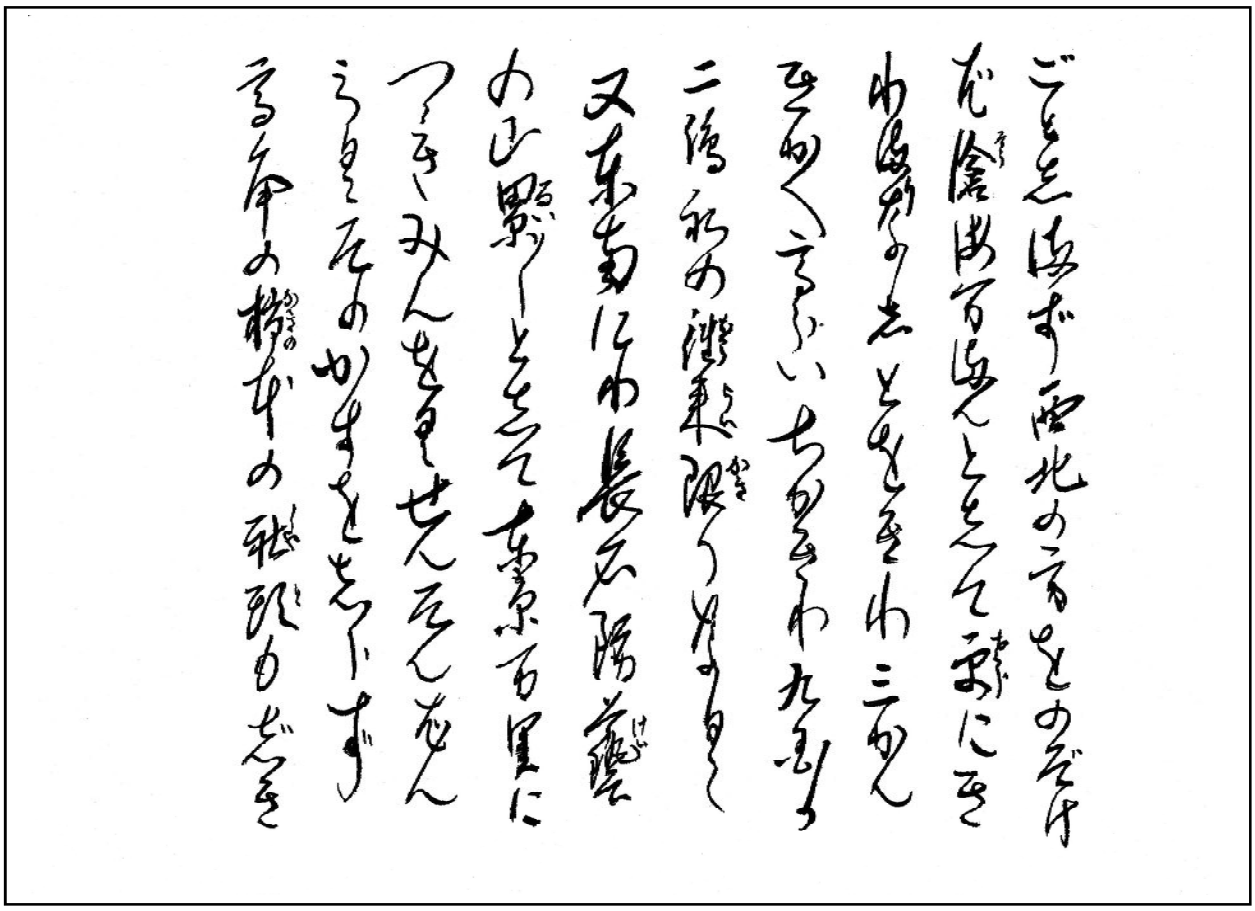
さがてん王の御宇　弘仁元年
（嵯峨天皇）　（810）
かのへとらのあき　みもりといふ
（庚寅）　（秋）
所に方三四丁の社地を
廣め大いなるやしろをこん
（社）　（建）
りふあり　ふもとのひろかたに
（立）　（麓）　（廣潟）
大鳥へあり　御供でん等迄も
（鳥居）　（殿）
夫々に使田あり　其のち野火
（賜田カ）　（災）
のわざわいによつて社中不残
くわいじんす　頼朝卿の時に
（灰燼）　（ま脱）
あたりて再建した□ふといへ共



じんざんぼうざんにづつけば
時のさいによりてたび〳〵
くわいじんす　今わつかにきう
でんほんどう等をいとなむといへ
共近里えんそんよりこれを
たつとみしんかうす　夫よりざん
がん[注1]をふみもうせしを　よじの
ぼり　ようやくぜつちやうにいたれ
れば　まことに宇ちうのがぎり
なき事　天との間に居するが

深山カ　茅山　続
災　灰燼　僅　営　給
田　本堂　遠村
尊　信仰
嶮　攀
厳　踏み
登　漸　絶頂　至
誠　宙　限

*1 嶮厳（ざんがん）＝きりたったような険しい崖。

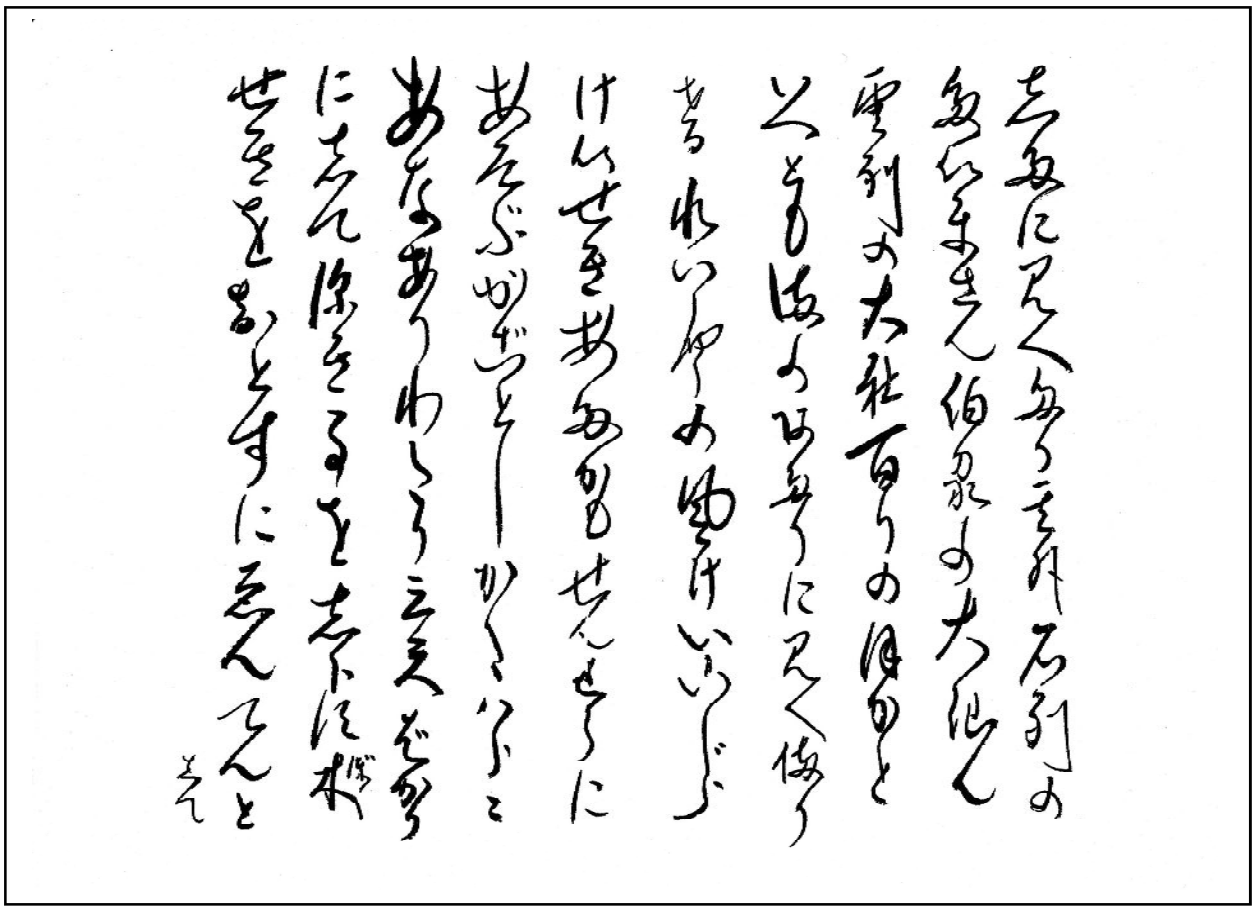


ごとし（如）　まず西北の方をのぞけ
ば滄海万まんとして更にき（極）
わまりなき（満々）　とをきわ三かん（遠）（韓）注1
きかへ（鬼界）注2高らい（高麗）　ちかきわ九国（近）の
二嶋（壱岐対馬）　社の往来限りなく
又東南にわ長・石・防・藝
の山累（続）〳〵として東原（京カ）万里（民屋）（千村）
つゝき（屋）　みんをくせんそんば□（数）（ん脱）
之く（屋）　そのかずをしらす（知らず）
高角の柿本の社頭注3もじ

*1 三韓＝①古代朝鮮南部拠った馬韓、辰韓、弁韓の総称。それぞれが数十の部族国家に分かれていた。②新羅、百済、高句麗の総称。ここでは②であろう。

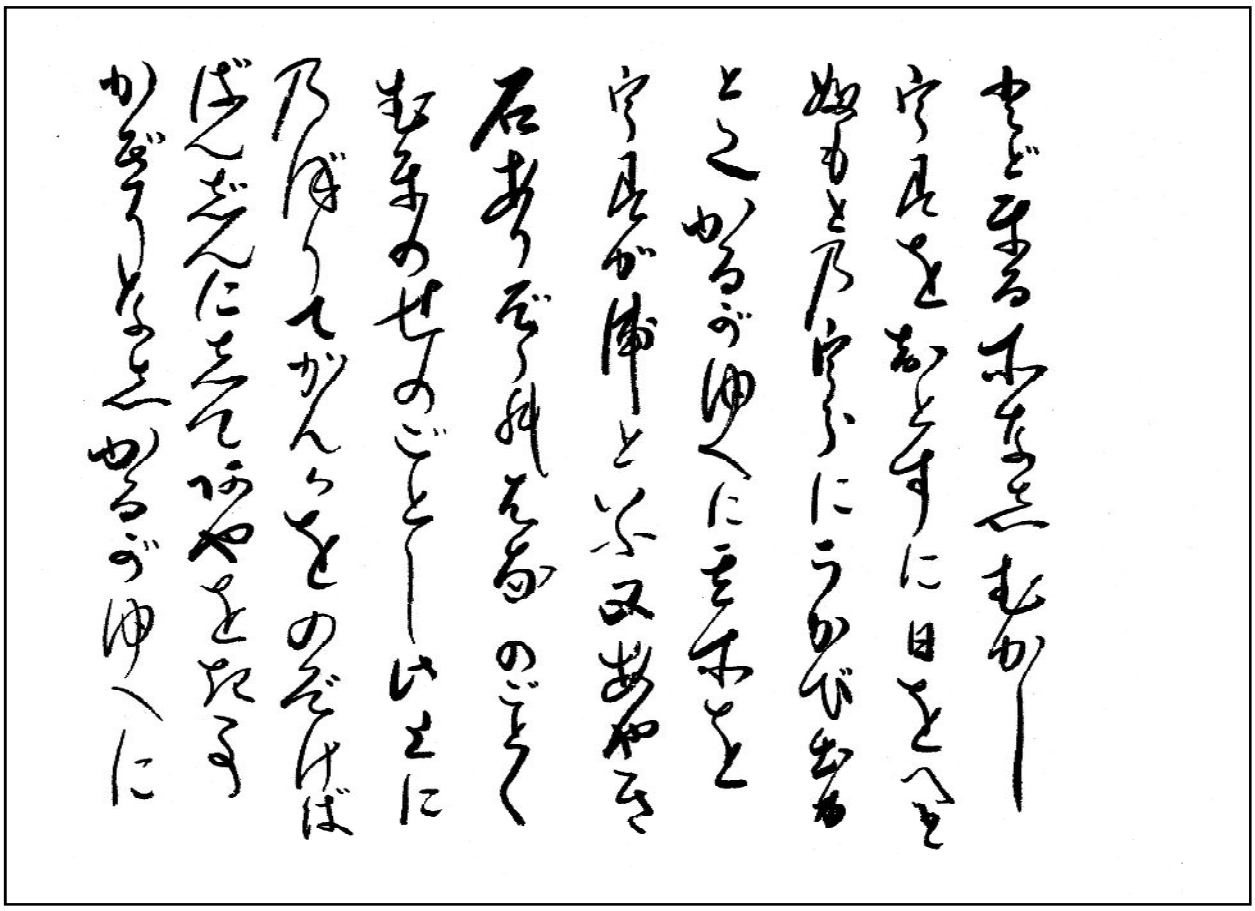
*2 きかへ＝鬼界ヶ島。九州南方の諸島の古称。罪人を島流しにした。平家物語では、今の薩南諸島から沖縄までの12島。

*3 高角の柿本の社頭＝柿本神社。益田市高津町、高角山（標高470m）の山頂にある。神亀年間（724～28）の建立という。柿本人麻呂を祀る。



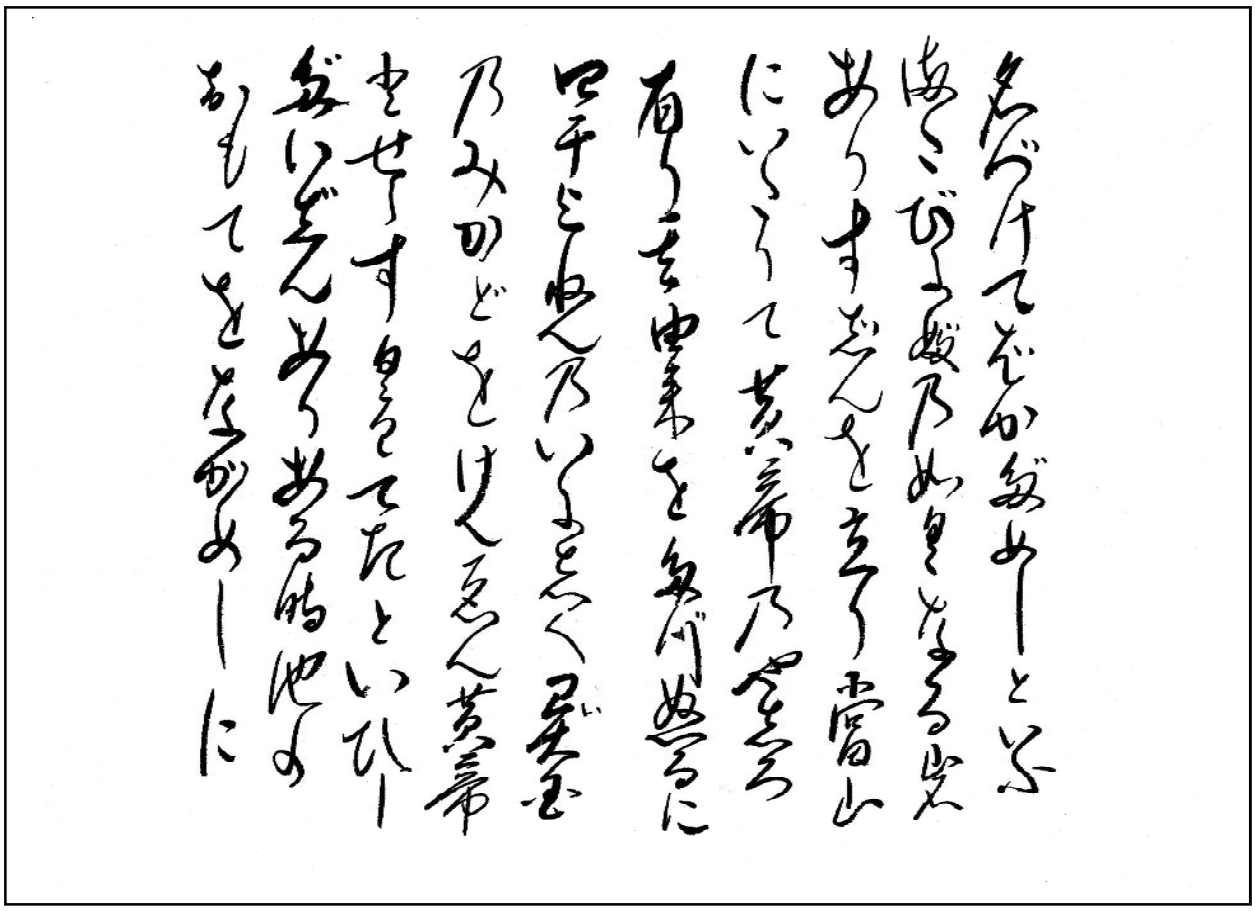
しま注4に見へたり　其外石州の
たいまさん注5（大麻山）　伯州の大仙ん（大山）
雲州の大社　百りのほかと（里）
いへどもまのあたりに見へ侍り（雖）（目の当り）
ける（景）れいしゆう（霊秀カ）の風けい（仙洞）いじら（形跡）
けいせき　あたかもせんとう注6（恰も）に（傍ら）
あそぶかごとし（遊）　かタハらニ（穴）
あなあり　わたり三尺ばかり（知らず）
にして深き事をしらす（円転）　木（石）
せきをおとす（落）にえんてんとして

*4 大麻山（たいまさん）＝島根県浜田市三隅町の山。標高599m。山頂にテレビ塔、無線の中継アンテナがある。
*5 じしま→しじまカ＝静寂。静まりかえっていること。
*6 仙洞（せんとう）＝仙人の居所。



とどまる所なし　むかし
うすをおとすに　日をへて
ふもとのうらにうかび出る
と也　かかるがゆへに其所を
うすが浦といふ　又あやき注1
石ありぞうのはなのごとく
むま注2のせのごとし　此上に
のぼりてがんかをのぞけば
ばんじんにしてあやをき事
かぎりなし　かかるがゆへに

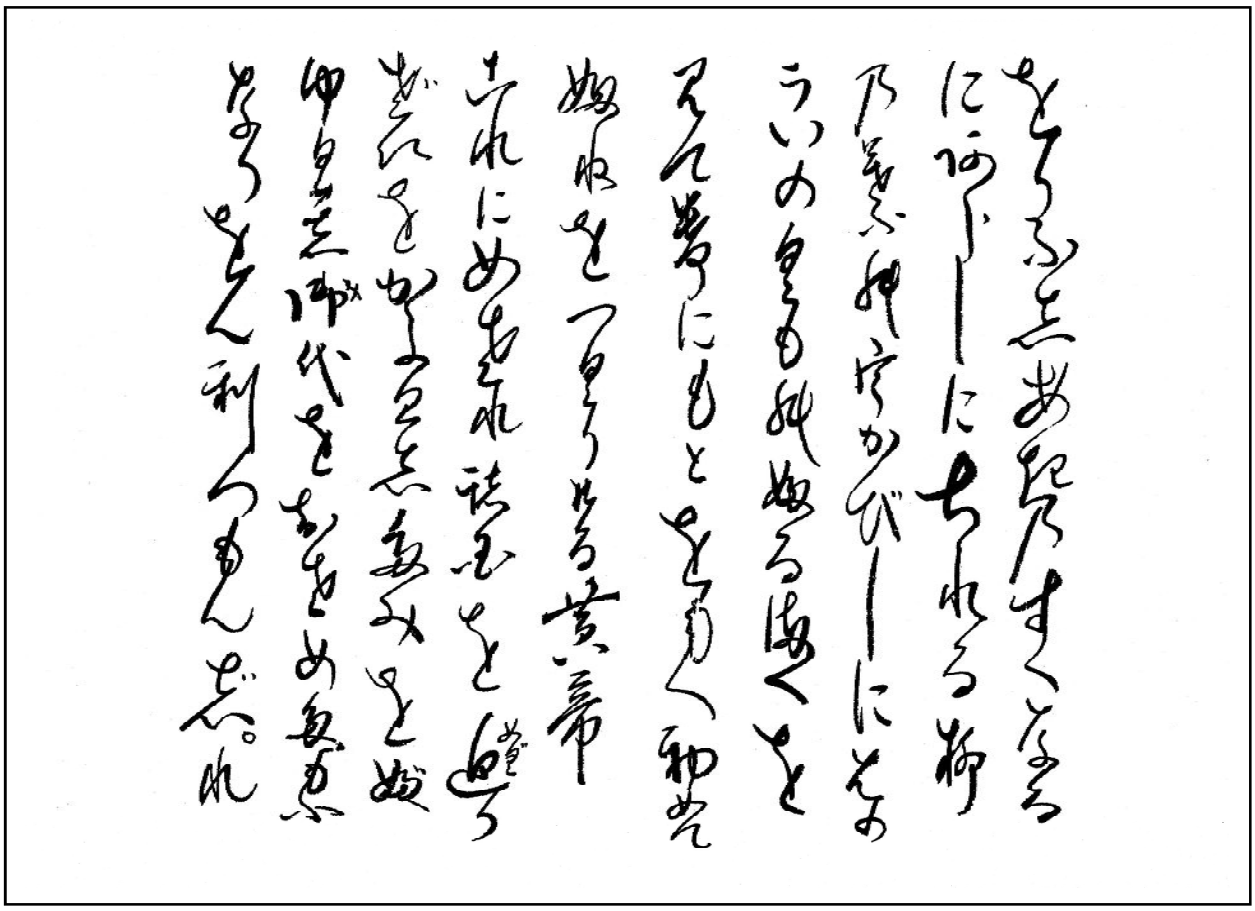
*1 綾き＝物の面に表れた様々な線や形の模様。特に斜めに交差した模様。
*2 むま＝馬と同じ。
*3 ばかだめし＝フォルンフェルスの事か。
*4 軒轅（けんえん）＝黄帝（紀元前2510年～紀元前2448年）。姓は姫姓、名は軒轅という。神話伝説上では、三皇の治世を継ぎ、中国を統治した五帝の最初の帝であるとされる。また、三皇のうちに数えられることもある。彼以降の4人の五帝と、夏、殷、周、秦の始祖を初め数多くの諸侯が黄帝の子孫であるとされる。おそらくは、中国に都



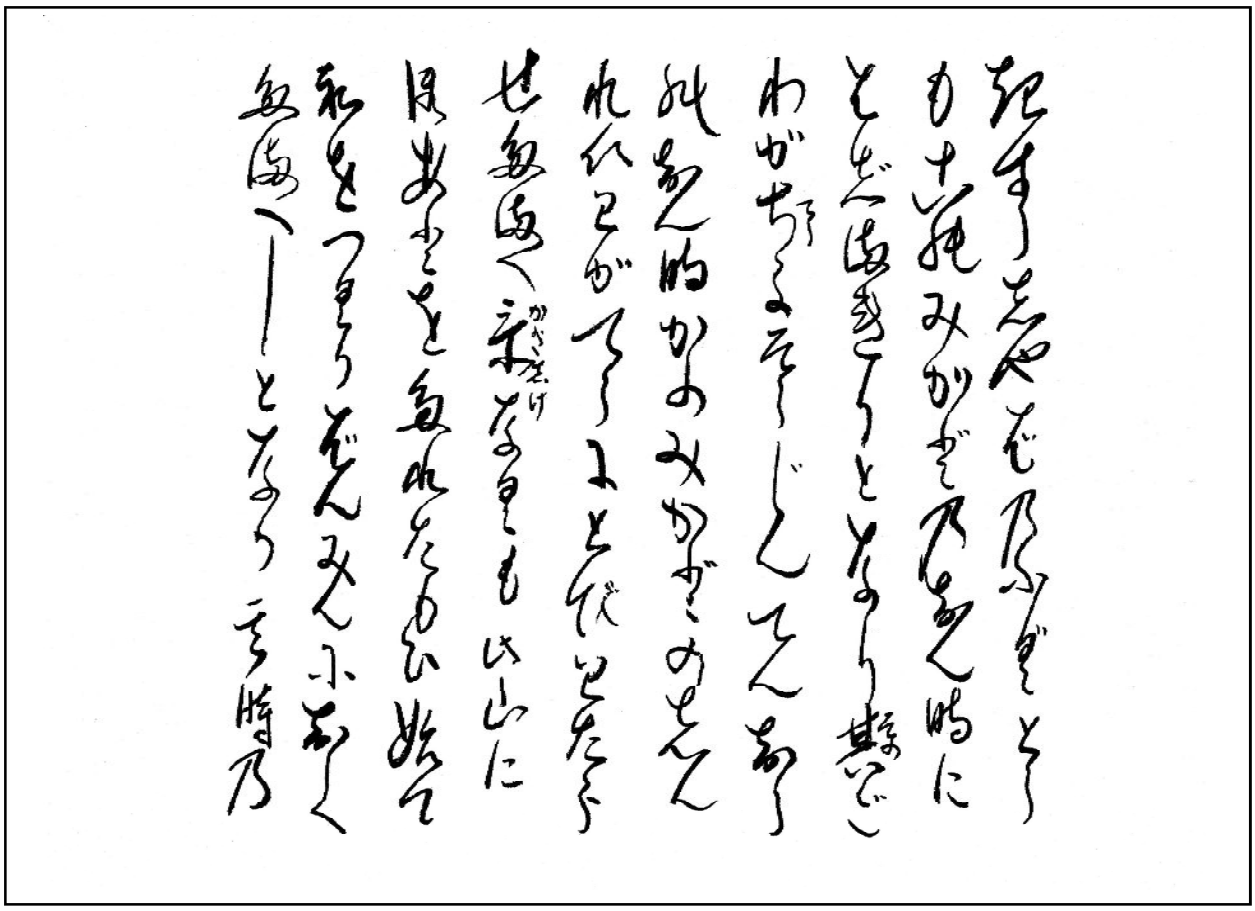
名づけてばかだめし（馬鹿試し）注3といふ
またびよぶの（屏風）如くなる岩
あり　すじん（数仞カ）を立り　當山（社）
にいたり（至）て黄帝のやしろ
有り　其由来をたずぬ（尋）るに
四千よねんのいにしへ（古）（余年）異国
のみかどをけんえん（帝）（軒轅）黄帝
とせうす（称）くわてきといひし（貨狄）（言）
だいじん（大臣）あり　ある時池の
おもてを（表）ながめ（眺）しに

市国家群が形成され、それぞれの君主が諸侯となっていく過程で、擬制的な血縁関係を結んでいった諸侯たちの始祖として黄帝像が仮託されたのであろう。さらに後世になると、中国の多くの姓氏が始祖を三代の帝王や諸侯としたので、現在も多くの漢民族は黄帝を先祖に仰いでいる。また、清代末期に革命派が、黄帝が即位した年を紀元とする黄帝紀元と称する暦を用いて清朝への対抗意識を示したことはよく知られる。

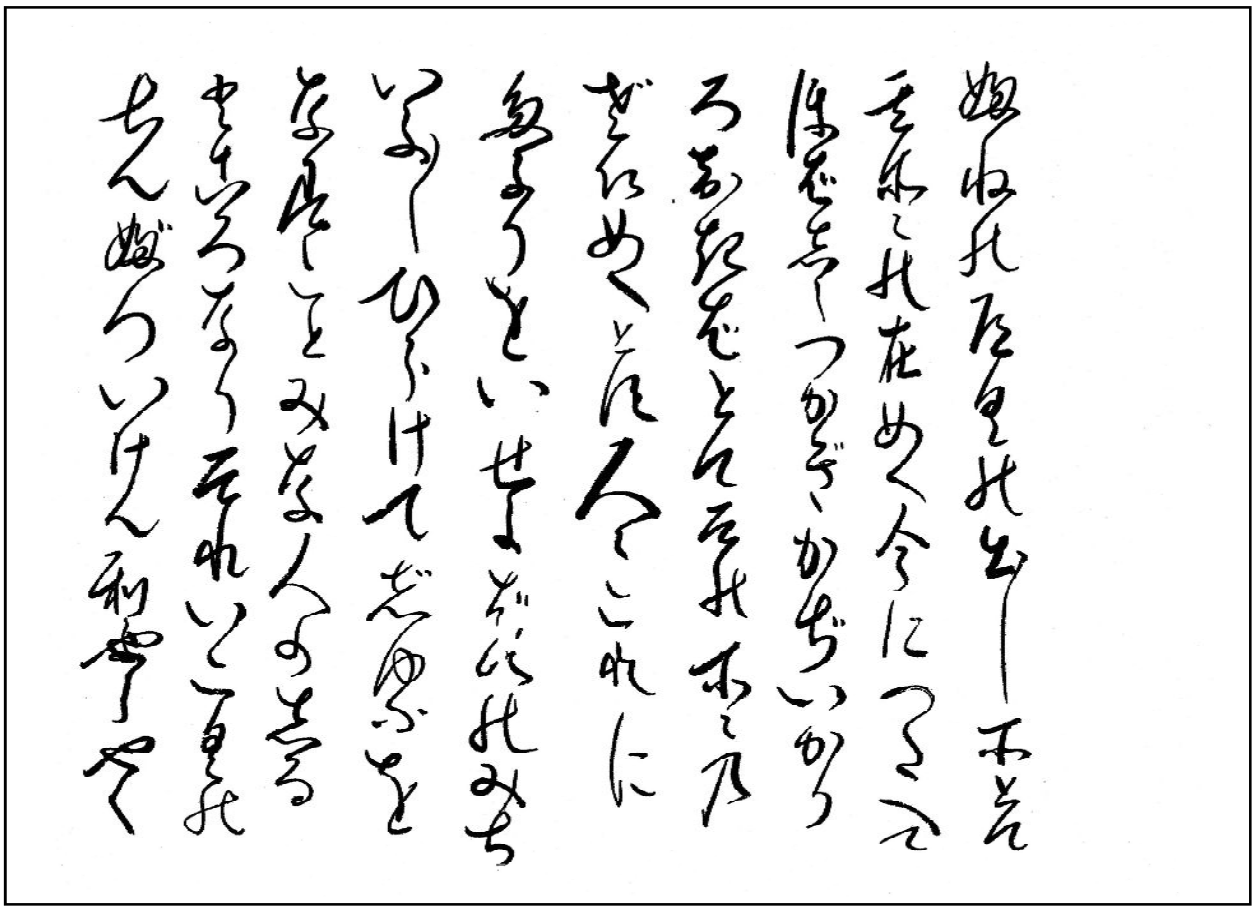
*5　貨狄＝黄帝の臣で、舟を考案した人といわれる。謡曲「自然居士」にみえる。26頁、巻末補注参照。



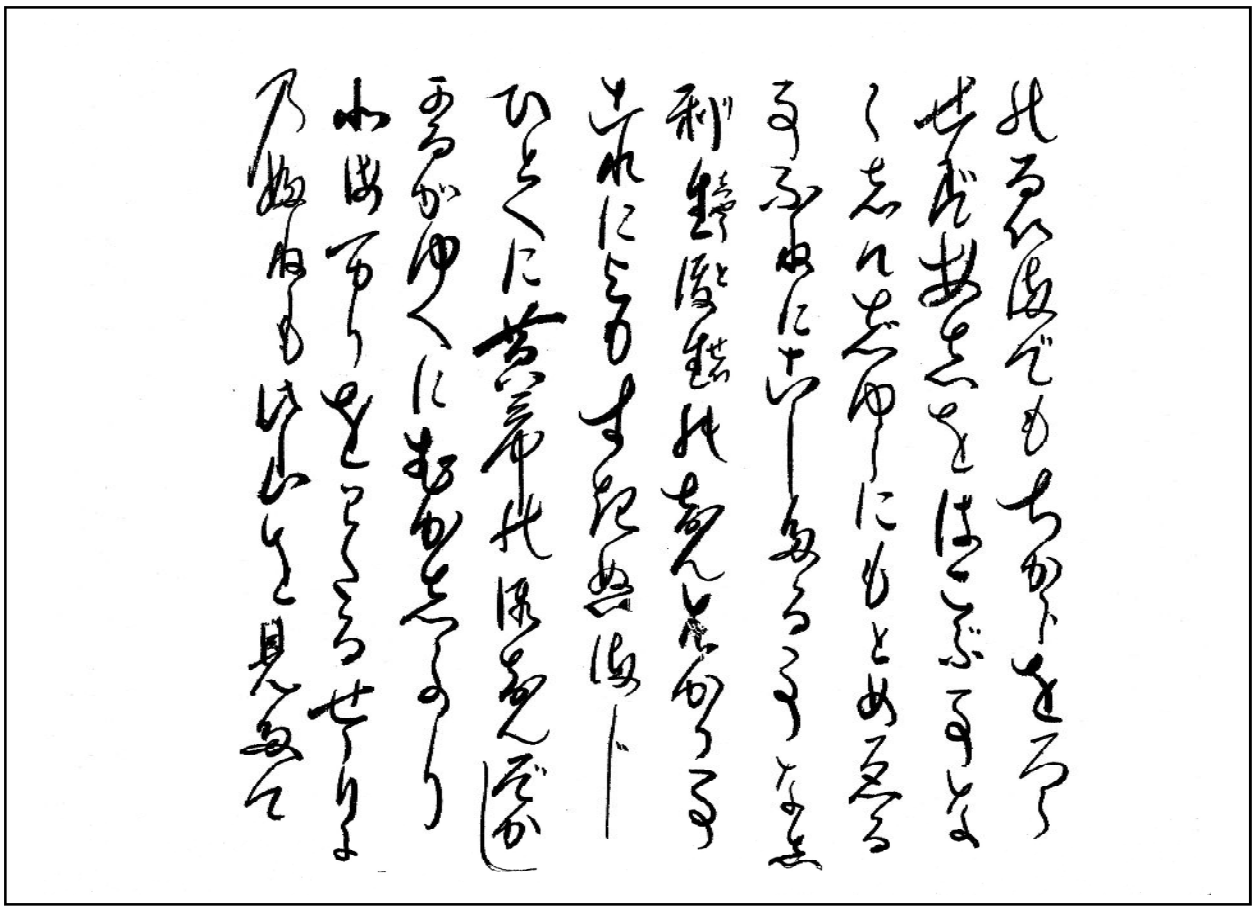
をりふし(折節)　あきのすへなる(秋末)
にあらしにちれる柳(嵐散)
の葉のうかびしにはの(浮葉)
ういのくものふるまへを(上蜘蛛振舞)
見て　けにもとをもへ初めて(げにも思)
ふねをつくりける　黄帝(船召)
これにめされ諸国を廻り(めぐ)
さいをかよわし　たみをぶ(財通民撫)
ゆくし　御代をおさめたもふ(育治給)
なり　をん利つ　もんじ　れ(音律文字)



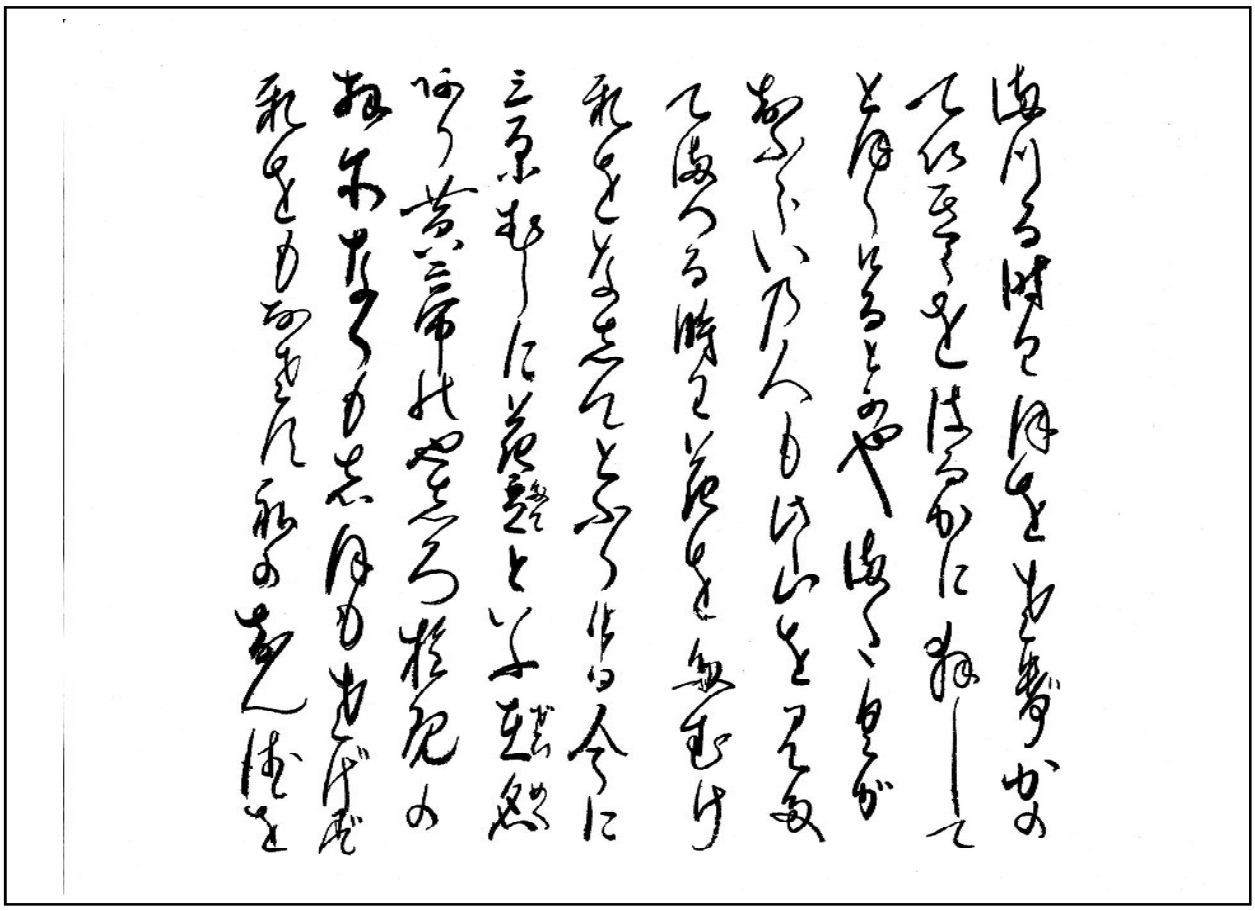
きすうしやば（暦数 車馬）のふぐとう（農具 等）
もこのみかどのおん時に（帝 御）
はじまれりとなり 其ご（始 後）
わがちよそうじんてんおう（我が朝 崇神天皇）
のおん時かのみかどのしん（御 帝 我が朝 飛 渡）
れいわかてうにとひわたら（霊 神 給 かたじけ）
せたまへ 忝なくも此山に（給 垂 給）
御あとをたれたもひ 始て（跡 人民 教）
社をつくり じんみんにおしへ（造）
たまへしとなり 其時の（給）



ふね(船)の道具の出し所とて
其所々の在め(名)へ今につたへて(伝)
ほばしら(帆柱) つかぎ(塚木) かぢ(梶) いかり(碇)
ろおきば(櫓置場) とてその所々の
ざいめ(在名)へとす 人々これに
たよりを(頼)い(得) せよはいのみち(商賣)
いよ／＼ひらけてじゆふを(開)(自由)
なすことみな人のしる(皆)(知)
ところなり それいこくの(異国)
ちんぶつ(珍物) いけん(衣絹) 利やうやく(良薬)

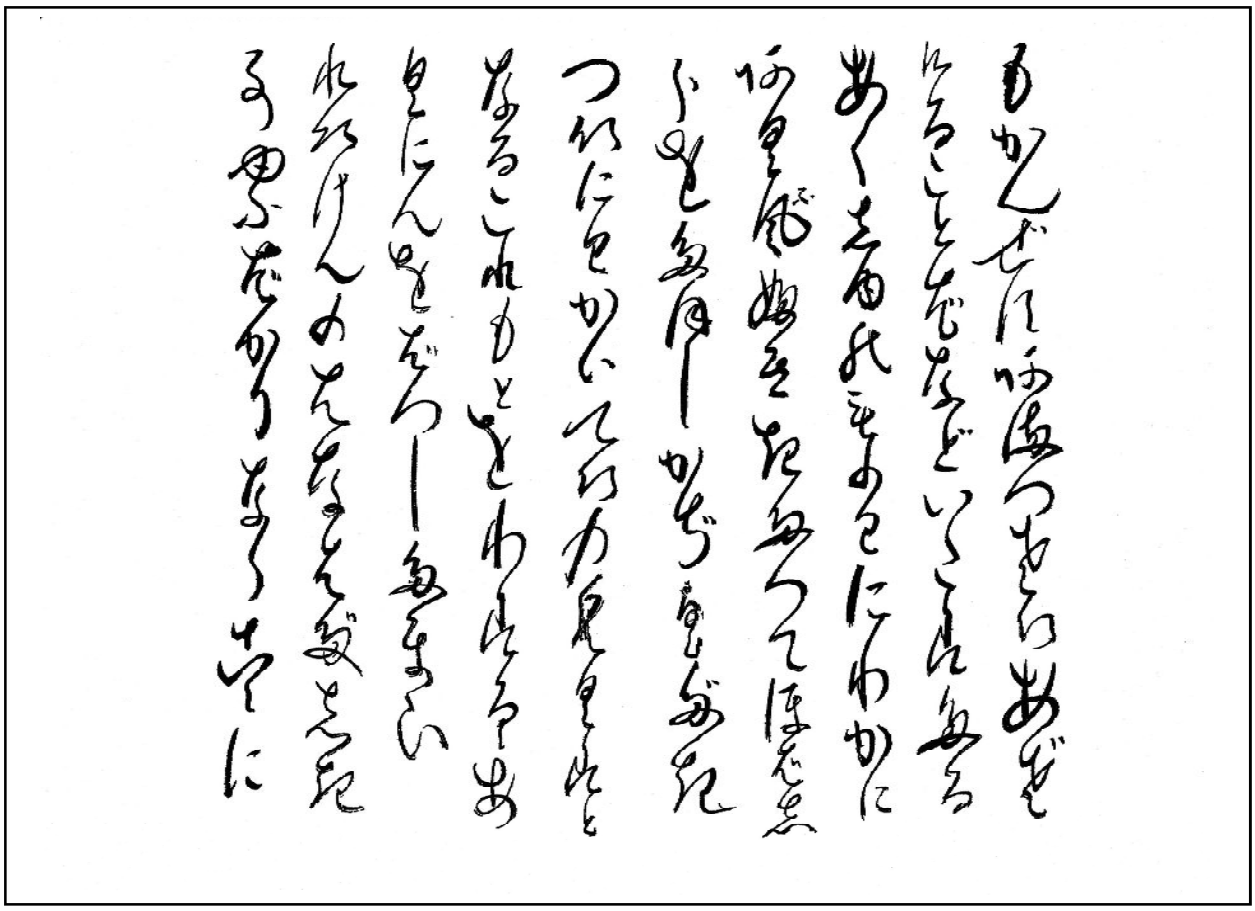


のるい(類)までも ちから(力)をろう(労)
せず あし(足)をはこぶ(運)事な
くしてじゆう(自由)にもとめる(求)る(得)
事ふね(船)にこし(越)たる事なし
利生渡世(世)のおん(御)はかり(図り)事
これによもすきぬ(過)まじ
ひとへ(偏)に黄帝の御おん(恩)ぞかし
かかるがゆへ(故)に むかし(昔)より
北海万(里)りをわた(渡)る せうりよ(商旅)
のふね(船)も 此山を見たて



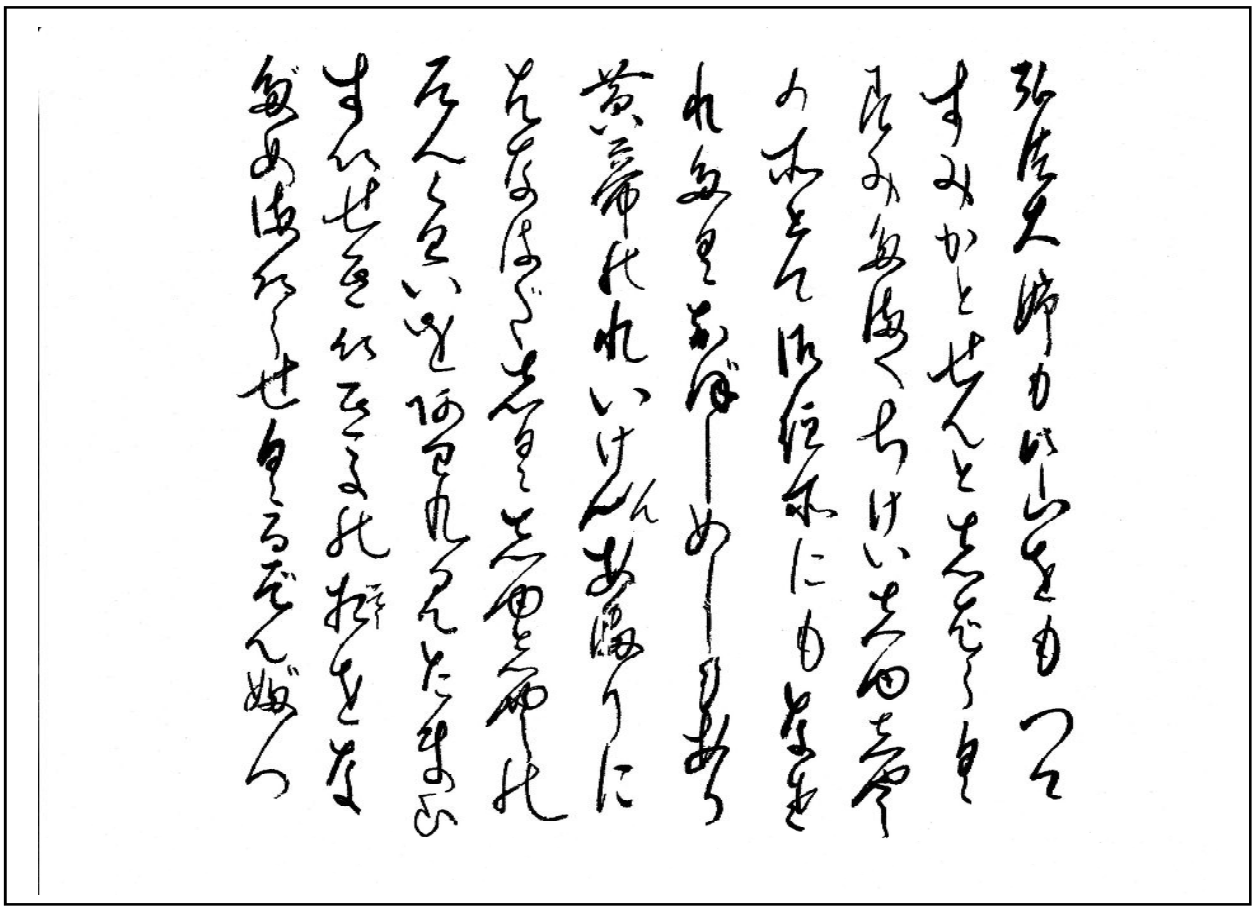
まつる時わ　ほをさけ　かの
ていきうをはるかに拝して
とほりけるとかや　またくが
おふらいの人も此山を見た
てまつる時わ　花をたむけ
礼をなしてとふりける　今に
三原むらに花立といふ在名
あり　黄帝のやしろ　権現の
拝所なり　もしほもさげず
礼をもなさず　船のおん徳を

*1　くが＝陸。クヌガの略。



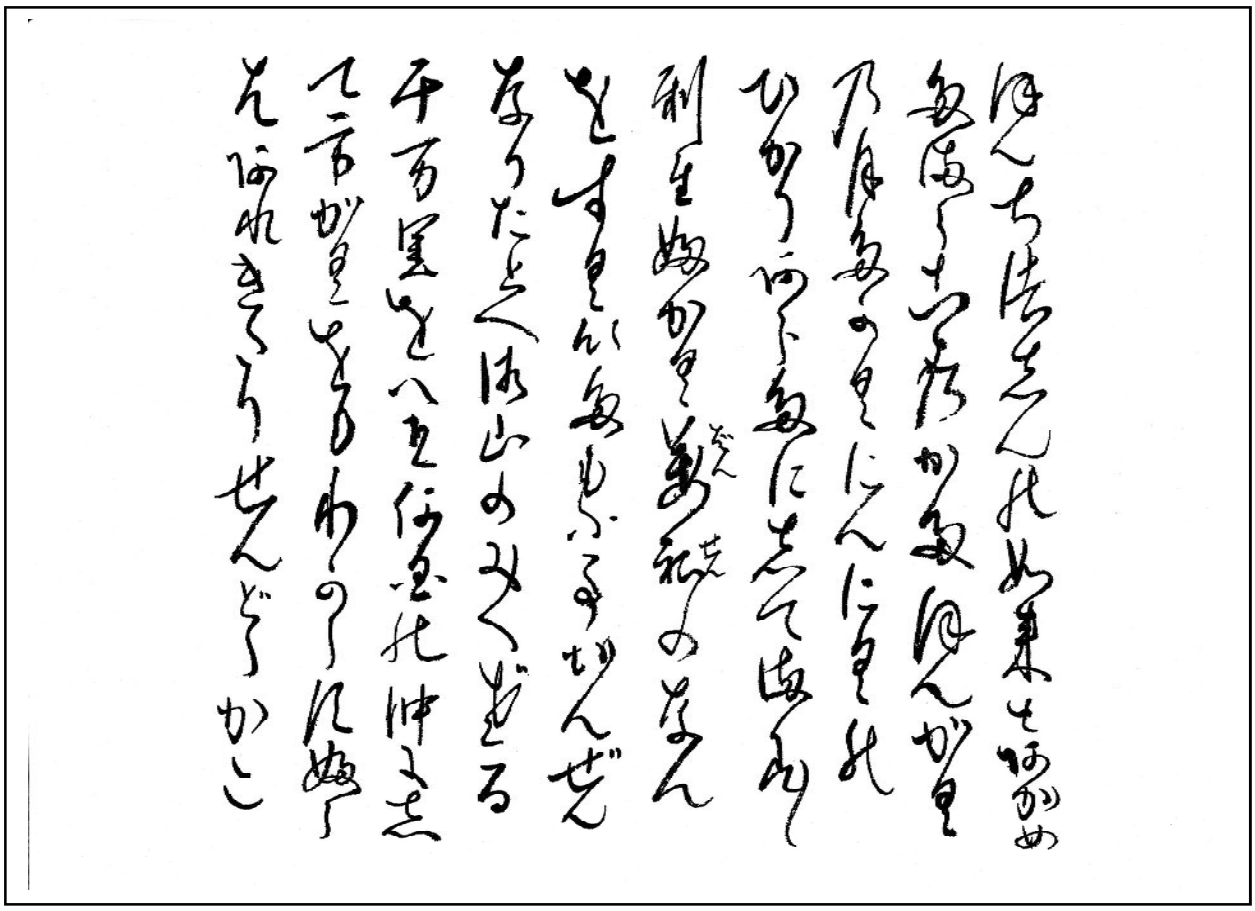
もかんぜず　あまつさい　あざ
けることばなどいたすたる
あくしゆのものわ　にわかに
かく風ふきたつて　ほばし
らをたほし　かぢくだき
ついにわ　かいていのもくず
なる　これもとをわすれるあ
くにんを　ばつしたまい
れいけんのはなはだしき
事ゆふばかりなり　こゝに

感　言葉　致し　あまつさえ　嘲　悪趣　者　俄　吹　来　帆柱　倒　舵　砕　海底　終　本　忘　藻屑　悪　人　罰　給　霊験　甚　言う



弘法大師（大師）大姉も此山を（以）もつて
すみかとせん（住処）とし（暫）ばらく
すみたまへ（住給）ちけいしゆしやう（地形）（殊勝）
の所とて御住所にもなさ
れたくおぼ（思召）しめしもあり
黄帝のれいけん（霊験）あまり（余）に
はなはだ（甚）しく しゆしやう（衆生）の（給）
そんくわい（損壊）（哀）をあわれ見たまひ（宥）
すいせき（垂跡）いきよ（い脱カ）□の相をな（狗留孫佛）
だめまいらせ くるそんぶつ

*1 そんくわい＝素懐（そかい）か。→平素の願い。かねてからの願い。



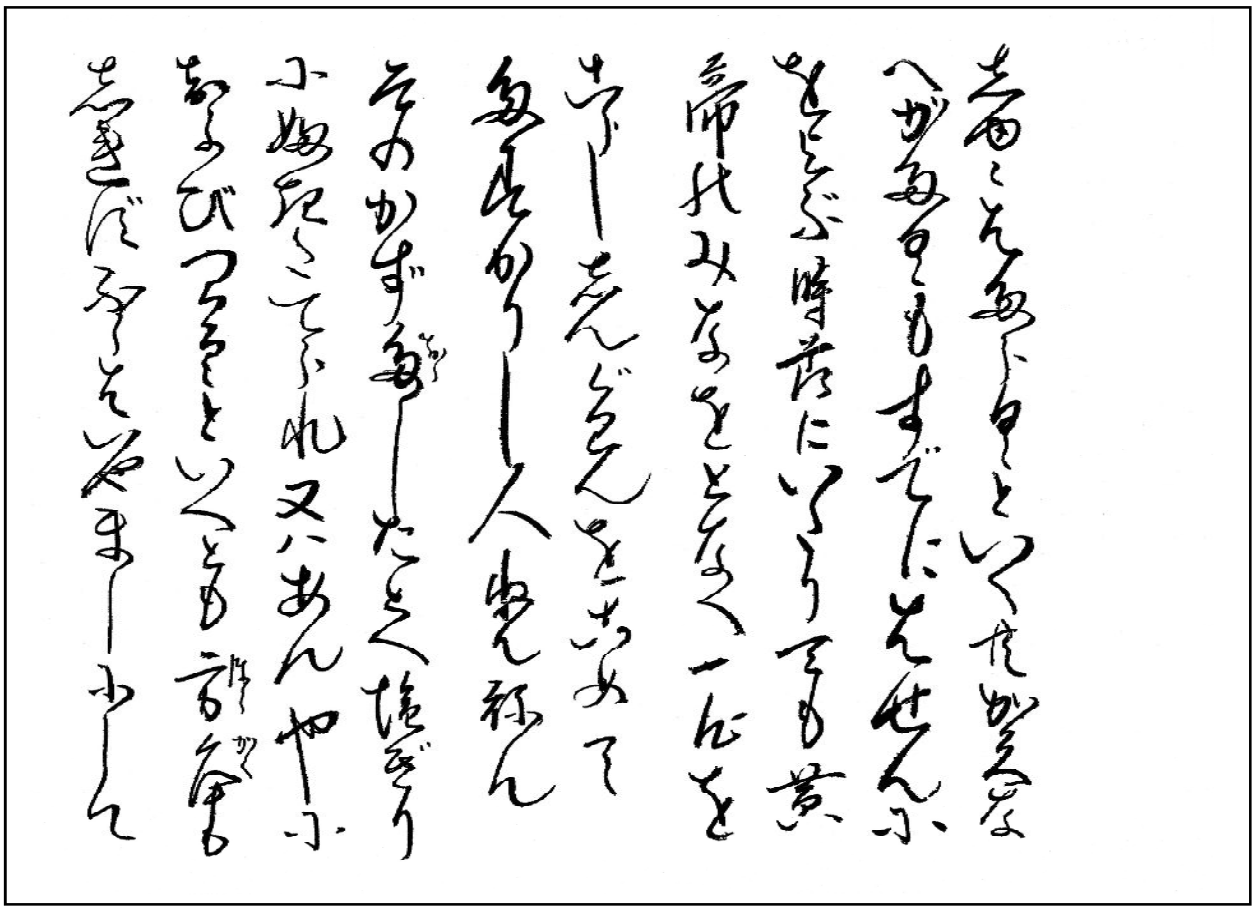
本地法しん(身)注1の如来をあがめ
たまうこのかた(給) ほんがく(本覚)注3
の月たかく(高) にんにく(忍辱)注4の
ひかり(光)あらたにして ます〳〵
利生ふかく(救) 萬船(難)のなん
をすくいたもふ(給)事 がんぜん(眼前)注5
なり(假令) たとへ(見) 御山のみへざる
千万里(隔て)をへ立 何国(角)の沖にし
て方(判)がくをも わからす ふう(風)
は(波荒来) あれきたり せんどう(船頭) かこ(舸子)

*2 本地法身＝本地（ほんじ）→仏・菩薩が衆生済度のために仮の姿をとってあらわれた垂迹身に対し、その本源たる仏・菩薩をいう。例えば、熊野権現の本地は阿弥陀如来とする。　法身（ほっしん）→永遠なる宇宙の理法そのものとしてとらえたれた仏のあり方。三身の一。色身、応身、報身などに対応。報性身。法身佛。

*3 本覚＝衆生に本来備わっている清浄な悟りの知恵。修行によって本覚を明らかにすることを始覚という。

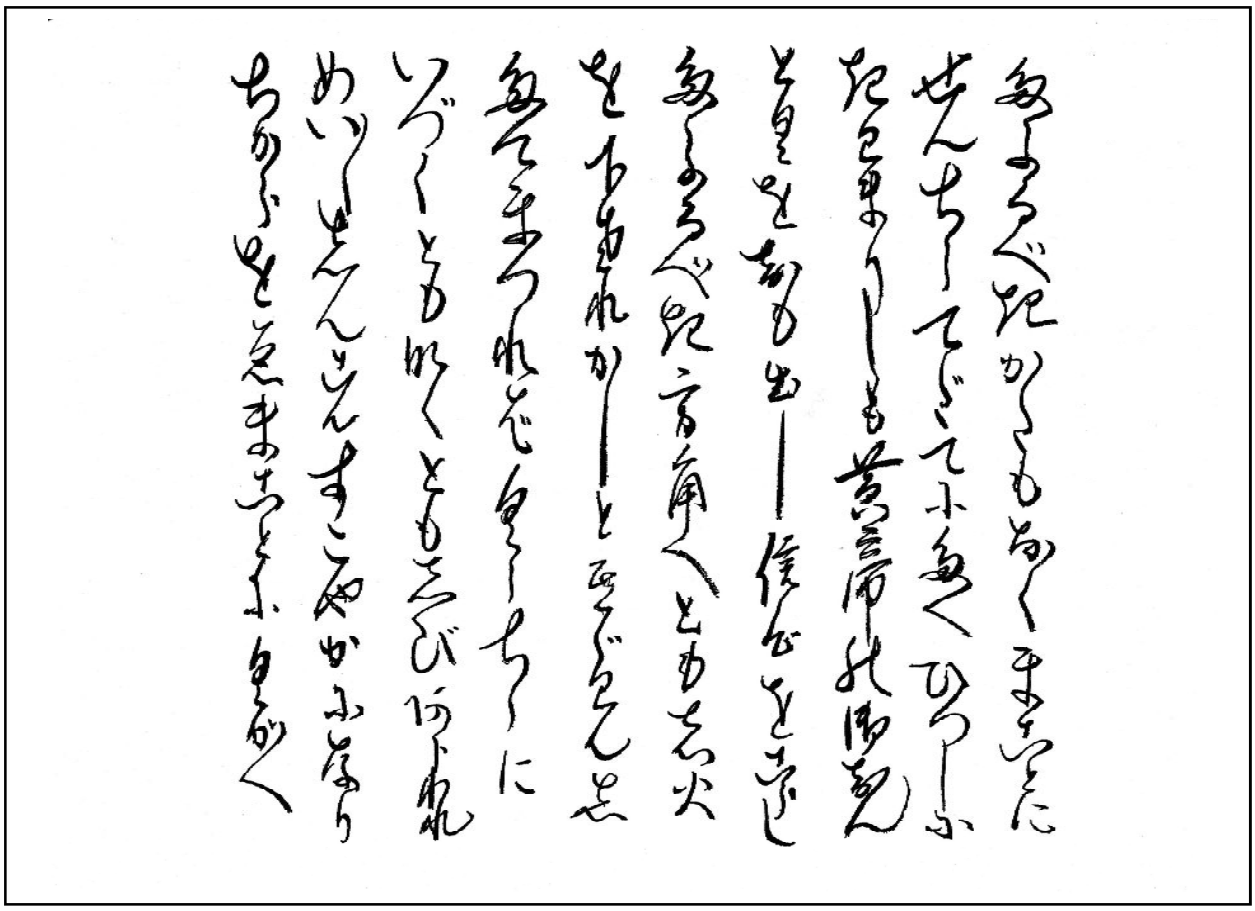
*4 忍辱＝（にんにく）六波羅蜜の一。もろもろの侮辱・迫害を忍受して恨まないこと。

*5 眼前＝明らかなこと。確かなこと。明白。／別に、親鸞の「願船」思想ではないかという説。

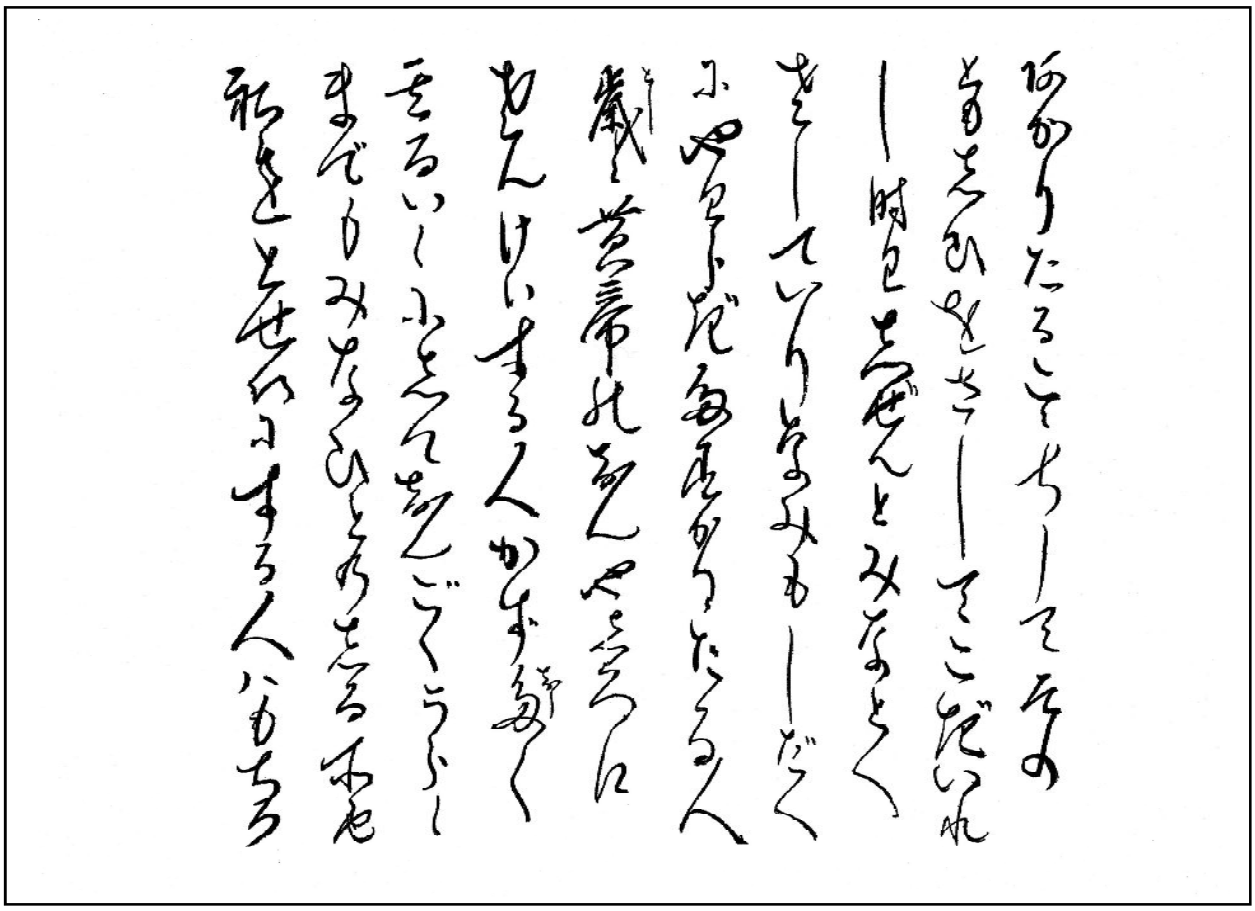


しゆ、、はたらくといへ共かな（種々 働 叶）
へがたくも　すでにはせんに（難 既 破船 至）
およぶ時節にいたりても　黄（及 唱）
帝のみなをとなへ　一心を（御名）
こらし　しんぐわんをこめて（凝 心願）
たすかりし人　ねんねん（助 年々）
そのかず多し　たとへ塩ぎり注1（数 假令 暗夜）
にふきたてられ　又ハあんやに（吹）
および　つ□といへとも方角も（風波）
しれずふうはいやましにして（知 弥増）

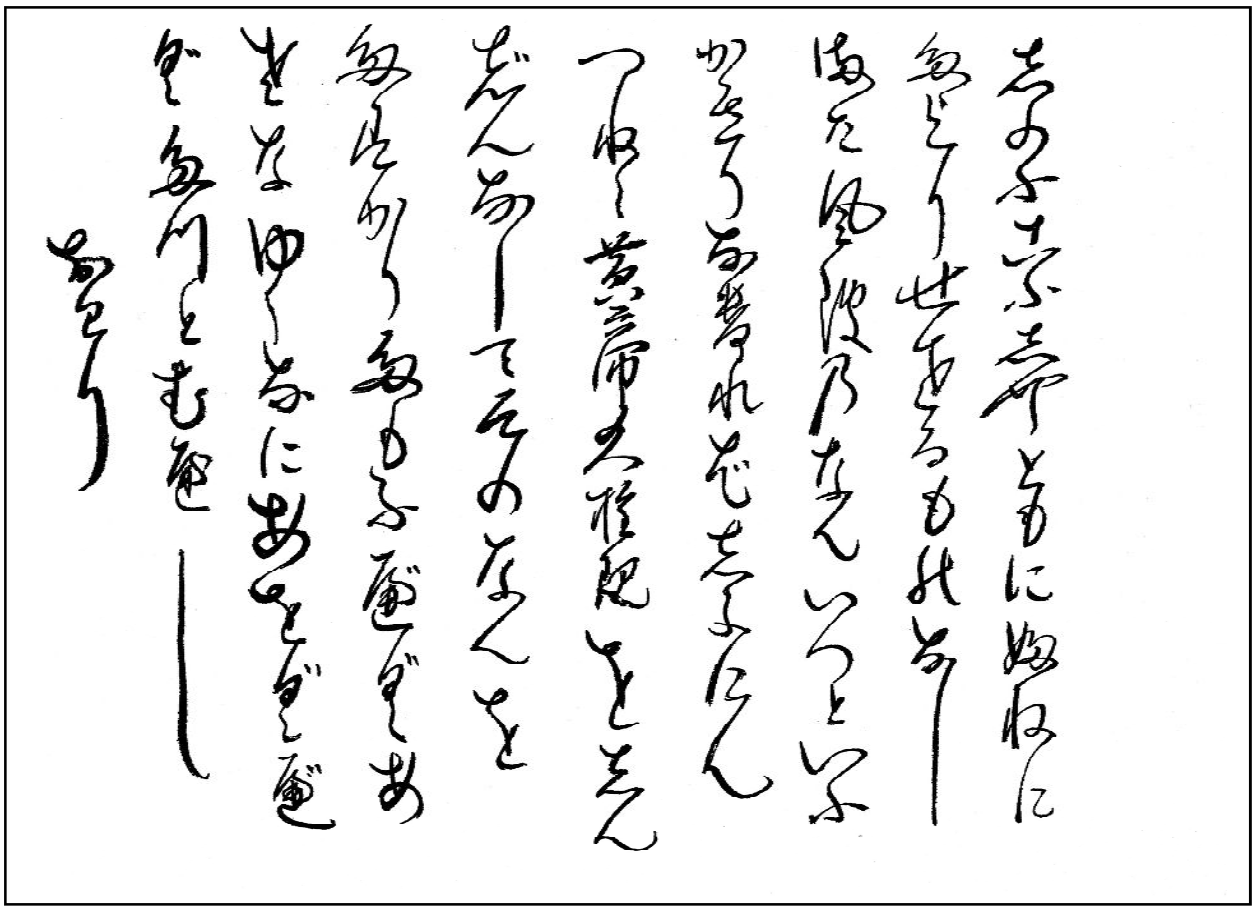
*1 塩ぎり＝潮切。①3月3日前後の頃、毎日曇るが雨の降らない天気。　②和船の梁の突出部につけて水切りをよくするもの。③和船の舳（みよし）の前につけて水切りをよくする部分。なみきり。



たよるべきかたもなく　まことに
せんちうてだてにたへ　ひつしに
きわまりしも　黄帝の御おん
とくをおも出し　信心をこらし
たよるべき方角へともし火
を下されかしと　きぐわんし
たてまつれば　くうちうに
いづくともなく　ともしびあらわれ
めい〳〵しんこんすこやかになり
ちからをゑ　まことにくがへ



あがりたるここちして（上・心地）そのともしびをさして（灯火・指）こぎいれし時わ（指）しぜんとみなとへ（自然・港）さしていり（入）なみもしだへ（波・次第）にやわらぎ（指）たすかりたる人（助）歳々黄帝のおんやしろに（御社）さんけいする人かず多く（参詣・数）其るい〳〵にしておんごくうら〳〵（累々・遠国・浦々）まても（皆）みなひとのしる所也（人・知）船をとせいにする人ハもちろ□（渡世・ん脱カ）



しのふこうしやうともにふねに（士農工商 共 船）
たよりせざるものなし（頼）
また風波のなんいつといふ（難 何時）
かぎりなければしよにんかぎりなし（限 無 諸人）
つねニ黄帝大権現をしん（常 信）
じんなしてそのなんを（心 難）
たすかりたもふべくあ（助 給 朝）
さなゆうなにあをぐべ（夕 尊 仰）
くたつとむべし
をわり

◇補注◇

（1）**首山**＝天下の名山は８つ。その内三つは蛮夷にあり五つは中国にある。崋山、首山（山西省永済県の南）、太室（嵩高）、泰山、東莱で、この五山は黄帝がいつもそこへ出掛けてそこの神と会合した所です。

黄帝は一方では戦いをしながら、一方では仙術を学びました。そして人民が、神仙の道をそしるのをきにかけたものですから、鬼神をそしるものの罪をさばいて斬り殺しました。こうして百年あまりのちに、はじめて神と交際することができましおた。

黄帝は雍で上帝に郊のまつりをささげたとき、三ヶ月そこに宿られました。そして鬼臾区（きゆく）は、その号を大鴻と申しましたが。（そのとき）死んで雍に葬られました。もとの鴻冢（こうちょう）がその塚です。そののち黄帝は、よろずの神霊に明廷（めいてい）で接見されました。明廷（めいてい）とは甘泉（宮）のことであり、寒門（塞門？）と呼ばれているのは谷口のことです。

黄帝は首山の銅を採掘して、鼎を荊山（けいざん）（河南省?郷県の南）の麓で鋳造しました。鼎が丁度出来上がったとき、あごひげを垂れた龍が現れて、下りてきて黄帝を迎えたのです。黄帝が龍の背に上って馬乗りになり、並み居る臣下と後宮の女性達のうち、天子に従うもの七〇人余りになると龍は上昇して立ち去りました。取り残された小臣たちは、よじ登る機会が得られなかったので、皆して龍のひげをつかまえました。龍のひげが抜け落ちて、そのはずみで黄帝の弓がぽとりと落ちました。人民達が仰ぎ見たときには、黄帝はもう天に上った後でした。そこでやむなく弓と龍のあごひげとを抱きかかえて泣き叫ぶばかりでした。その為後世これに因んで、そこを鼎湖と名付け、その弓を烏号（おごう）と呼ぶことになりました。

すると、天子は「ああ！　わたしがほんとに黄帝のようになれるものなら、わたしは妻子をすてる決心など、くつを脱ぐくらいにしてみせるのだが！」と言われて，初めて公孫卿を郎の位につけ、東の方へやって太室山で神の様子をうかがわせる事にしました。（史記　書　封禅書（第六）武帝より）

（2）**貨狄**（かてき）＝黄帝の臣で、舟を考案した人といわれる。

謡曲「自然居士」にみえる。

以下、謡曲「自然居士」の詞章、舞囃子から抜粋。

『黄帝の臣下に。貨狄といえる士卒あり。ある時貨狄庭上の。池の面を見渡せば．おりふし秋の末なるに。寒き嵐に散る柳の．一葉水に浮みしに。また蜘蛛という虫。これも虚空に落ちけるが．その一葉の上に乗りつつ。次第次第にささがにの．糸はかなくも柳の葉を。吹きくる風にさそわれ。汀に寄りし秋霧の。立ちくる蜘蛛の振舞。げにもと思いそめしよりたくみて舟を作れり。黄帝これに召されて。烏江を漕ぎ渡りて．蚩尤を安く亡し。おん代を治めたもう事。一万八千歳とかや。しかれば船のせんの字を。公にすすむと書きたり。さてまた天子のおん舸を。竜舸と名づけ奉り。舟を一葉という事。この御宇より始まれり。また君のご座舟を。竜頭鷁首と申すも．このみ代より起れり。』